

# 具足戒の効用について

佐 藤 密 雄

## (一)

律藏小品の第一犍度が羯磨犍度であるが、此中には七種の羯磨が記してあつて、其七種はいづれも、僧伽が比丘の非行を強制的に懲罰し處分する手續である。僧伽には既に二百有餘の戒條を有する具足戒があり、罪を犯したものは、極重罪の波羅夷は追放、其他の僧殘法以下は別住・應悔等と、罪の輕重に従て服罪出罪の仕方迄定まつて居る筈であるし、然も夫は、具足戒と言はれる程に完全せるものとされて居るのである。然るに、其の外に更に七種の懲罰的羯磨が制定され、然も其の七種の大部分が適用の對象を具足戒と重複して居り、且つ具足戒に強制力を補ふものとなつて居るのである。此處に私共は、具足戒には、此を比丘に強ひる強制力が缺けて居り、此を補ふものとして、七種の羯磨が登上制定を見るに至つたのではないかと考へるのである。

勿論具足戒は比丘をして比丘たらしめるもので、具足戒を授かることに依つて、聖職者比丘となるのであるし、又半月半月の布薩式は具足戒の波羅提木叉が讀誦されるのであるが、此は其式辭の示す如く、比丘が具足戒について清淨であること、即ち比丘として缺くるなきことを反省自覺する式である。即ち、具足戒の受持を誓つて比丘と

なり、半月毎に其の受持に缺くるなきやを反省するのであるが、其様な嚴重な尊重にもかゝはらず、その尊重の強化はかへつて、戒學的觀念的な意味を強からしめ、儀典化し、律制としての實力を弱めたものとも考へられる。

七種羯磨の中に不見罪舉罪羯磨がある。其の制定の因縁談に依ると、佛陀が憍賞彌國の瞿師羅園に住せられた時であつたが、長老比丘の闍陀が罪を犯し、其罪を見やうとしなかつたので、少欲の比丘達は呾き憤つて此の事を佛陀に告げ、佛陀は其を縁として僧衆を集め、闍陀の不見罪が事實であることを確めた上で、「比丘達よ、僧伽は比丘闍陀に罪を見ざるに依る舉罪羯磨を行ひ、僧伽と不共住ならしむるべし<sup>云</sup>」と決定されたのである。

此因縁談に依れば、不見罪舉罪羯磨の制度が既に制定されてあつて、此を闍陀に適用する様に判決が下された様に考へられるが、律藏では此闍陀の事件を機會に不見罪舉罪羯磨が始めて制定されることになり、其の羯磨の仕方の詳細を佛陀が定められたことゝなつて居る。勿論、實際としては、印度の沙門團の間に既に一般的に行はれて居た懲罰法を佛教が此機會に採用したものと考へるべきである。又、此の懲罰法に「不共住ならしむべし」と言つて居るが、此は彼の波羅夷罪の斷頭罪的不共住でなく、僧殘罪の別住の不定期なものと考えて大體差支のない内容のものである。

不見罪舉罪羯磨は、實は僧殘法の第十二と重複するものであつて、従つて僧殘第十二の服罪をすべきものが其をなさない場合に、其の服罪をなす迄實質的に僧殘別住同様の罰に強制處分する方法と考へられる。そして、此羯磨の因縁談も實は僧殘第十二の因縁談の略抄であつて、前者に簡略されて不明な部分即ち闍陀の不見罪の態度は後者を讀むことに依つて判明する。

## (二)

律藏の經分別部第一卷の僧殘法第十二(十誦律・四分律・有部律・五分律・解脫戒本等は第十三なるも今は便宜巴利律に従ふ)に依ると、闍陀が不善行をなしたので諸比丘が「友闍陀よ、是の如きことをなす勿れ、これは淨法に非ず」と忠告した所、闍陀は大長老の高慢さを以て「汝等は何をか我に教へ得ると考へるや、我こそ汝等に教ふべきである。佛は我等のもの、法は我等のもの、我等の聖主が法を得たのである。譬へば大風吹きて草葉樹片の汚物を一處に擧ぐるが如く、又譬へば諸川が山上の草木の青葉を一處に擧ぐるが如く、其如くに、汝等は種名、種々の姓、種々の家より出家して一處に擧げらるゝなり云」と罵言したのである。同様にして比丘達が三度忠告し、闍陀は三度罵言したので、僧殘法第十二の惡性違諫戒の制定となつたと言ふのである。不見罪擧罪羯磨には、此說話は既知のものとして、此を略抄して述べて、此時に此羯磨の制定があつたとし、更に同じ說話の略抄を用ひて不懺罪擧罪羯磨も此時に制定されたことになして居る。

闍陀は釋迦族の出身で、佛陀が成道後の第一回歸城の時出家した長老であつたと言はれ、釋迦族出身であることを誇りとして、佛陀も法も我等釋迦族出身の釋尊の成就されたものだから我等のものであるとなし、更に釋迦以外の各種族の出身者を、風が吹き寄せたごみや、川の流が山から運んだ草葉の集りに譬へて輕侮して、此因緣談の如き場合に立到つたとせられるのである。闍陀は律藏中では所謂六群比丘と言はれる六人のいたづら比丘に數へられ、六人合同で數多い律制の因緣談を持つのであるが、闍陀は單獨でも上述の外に僧殘法第七、波逸提第十二、第十九、第五十四、第七十一の諸戒制定の因緣談の主人公になつて居り、更に佛陀が入滅の時に遺言して彼には梵壇法を與

え僧伽をして「彼と話すべからず」とされたとも言はれる人で、律藏が因縁談作成に好んで用ひる比丘である。

此様な主人公を用ひた因縁談で制定された僧殘法第十二は次の様に說かれる。

「比丘が惡性であつて規定された中に含まれる學處について、他の比丘達から如法に話さるゝ時に、話されねばならぬことをなさしめず『具壽達よ、善き事も惡きことも何事も言ふ莫れ。私も亦、具壽達について、善き事も惡きことも言はじ。具壽達は私に語ることを罷めるべきである』と。其比丘は比丘達から此様に言はるべきである。即ち『具壽よ、自分の話されねばならぬことを話さしめざる様になす莫れ、自分の話されねばならぬ事を（話さるゝ様にせよ）。具壽も亦比丘達に言へ。比丘達も亦如法に具壽に語らん。何となれば、かくして此佛弟子衆は相諫め、相教へて増大しゆくのであるから』。若しも其比丘が比丘達に斯く言はれてなほ固執せば、其比丘は比丘達から三度迄諫められるべきである。三度諫められて其れを捨てばよし、然らざれば僧殘である」。

此の様に制定されて居る。そして、僧殘法を犯したものは、犯罪の日に直ちに服罪を申出すれば六夜の別住で、然らざるものは覆罪期間の別住を更に加へての別住に服罪せねばならないもので、此は波羅夷の放逐に次いで之の重罪である。又其の伏罪と出罪の決定宣告は共に二十人以上の僧伽で、全員立會の下になされるのであるから、十人僧伽でもなし得る授具足戒よりも更に慎重嚴重な取扱ひを要するものである。又別住の仕方についても、特に犍度部小品第二鍵に、別住犍度が設けられて居る程であるから、以て律藏に於ける其の重大視振りは察すべきものである。

### (三)

僧殘法第十二は四分律に従へば第十三の惡性拒僧違諫戒のことである。此の戒文は上に記した様に、自己の非行を三度迄諫められてもなほその諫めを拒絶すれば僧殘法の罪を犯したことになると言ふのである。従つて、此は諫められる比丘が既に第一次に非行を行じて居るが、それに對する諫めを拒絶したことに依つて生じた第二次の罪の罰罪を言つて居るのである。其處で此の様に三諫されても拒絶すれば僧殘罪になると規定されて居り、比丘たる限りは具足戒を受持して居るのであるし、半月半月には布薩說戒をなして受持を反省自覺して居るのであるから、三諫を拒絶すると同時に、其比丘が僧殘罪を犯したことになるのは、自他共に容易に知られるのである。然し、知られたからと言つて、犯罪者が伏罪を願出でざる限りは、直ちに全僧伽を招集して、吟味し當人に告白させ別住の罰を科すると言ふことは出來ないのである。

元來制戒の因縁談は、制戒の因縁にはなつて居るが、實際は判決例の役割をなして居るのもある。然し其は佛陀親裁の僧伽の判決例である。即ち制戒因縁の形式は、罪を犯したものと佛陀に告げるものがあり、其に基づいて佛陀は、罪を犯した當人を呼出し問糾して後、其非行たる所以を教誡して、爾後かゝる非行者があれば、例へば今の如き三諫拒絶の場合は僧殘罪であると結戒されるのである。従つて佛陀の在世には結戒の後も此因縁に順じて、非行比丘があり、佛陀が聞知され、續いて教誡して罰罪の言渡しがあつたと想像されるのである。

然し乍ら、律藏の經分別部、特に第一戒の不淨行戒の犯罪者が伏罪に至る迄の形式を見ると、先づ犯罪者に悔心が生じて、「世尊は學處を制し給へり、我れ若しや彼波羅夷を犯せるに非ずや」と疑ひ、佛陀の下に出頭して自の

所行を告白するのである。其時に佛陀が「汝は波羅夷を犯せず」とか、「犯ぜり」とか、「波羅夷を犯せず僧殘を犯ぜり」とか言はれることに依つて、其の罪が決定するのである。即ち犯罪者が自己の行狀を申出で、自己の罪狀を確認決定を求めるのである。佛陀の没後は、僧伽は無敎主制となつたから、此の佛陀に代るものは僧伽であつたと考へられる。

佛陀在世時代と雖も、犯罪者の罪狀が明になつても、例へば、佛陀から「汝は波羅夷を犯ぜり」と言はれた場合に、自ら退團を僧伽に請ふのか、僧伽が退團を命ずるのか一切定まつたものが見られないが、他の犯罪の例からすれば、犯者が除名を請ふのである。然し又比丘が比丘であるのは具足戒を受持して居るからで、その限り今波羅夷を犯ぜしことに依つて比丘でなくなつたのであるから、僧伽に居る資格が自然消滅したので、それだけのことで僧伽としての強制追放の方法の確たるものを有せず、必要ともしなかつたとも考へられる。

然し僧殘法を犯した場合は、小品別住犍度に伏罪の仕方があつて、其に依れば、先づ僧伽に自己の犯行を告白して罰としての別住を請ひ、有能の比丘が僧伽の招集をなし白四羯磨に依つて別住を與えるのであつて、出罪も亦同様である。そして此處に注意すべきは、服罪も出罪も犯罪者であり服罰者である當人の申請に基づいてなされることである。従つて、例へば佛陀から「汝の所行は僧殘である」と言はれたとしても、其の犯罪比丘が服罪を請はない限り、僧伽の方から檢舉斷罪する方法も權利もないのである。然も服罪しない犯罪比丘が居て實害を受けるのは僧伽である。即ち、僧伽の布薩等の日常行事から、受戒や出罪の重大行事に至る迄、一切の運営は全僧伽員の完全出席の會合下でなされるのであるが、其の中に犯罪不淨の比丘があつたのでは會合が不淨となり、不成立となり、従つて僧伽としての機能が停止される結果となるのである。闍陀を主人公とする僧殘法第十二と不見罪舉羯磨の關

係は、此様な場合の良き例である。

#### (四)

闍陀が第一次に犯した不善行は何であつたかは不明であるが、僧殘の戒文から見て具足戒の一學處を犯したものである。其事に關して比丘達が彼に對して服罪出罪して清淨となるべきことを諫言し忠告したものである。此處にも、具足戒を犯しても當人の伏罪請願以外に罰罪の仕方のないことが明らかに表現されて居る。其處で服罪せしめる第一の方法は、僧伽の比丘達の服罪の勧め即ち見罪諫告であると見られるが、此の方法に重大な効果を持たせる爲めに、三諫拒絶は僧殘罪だとしたのである。

律藏經分別に依れば、闍陀は僧殘第七の制戒因縁の主人公でもあつて、此處では、自分の房舎に用ふる爲に、一般人の奉祀する神廟の神木を伐らせる非行をなし、此について佛陀は僧殘第七を制戒されたことになつて居る。今、制戒因縁をば罰罪の判例と見るならば、此を假りに闍陀の第一次の僧殘罪相當の非行となせば、彼は此を見罪し服罪の申請を僧伽へ申出ざる爲に比丘達から忠告を受けたことになるが、此の忠告をも三諫拒絶して第二次の僧殘罪に相當する罪を重ねて犯したことになるのである。然も此は自他共に犯したことが明らかに知られて居る事件であるが、此の第二次の非行にもかゝらず、僧伽へ服罪を請はないとしても、僧伽には何等此を處置する方法はないのである。たゞ被害を被るのはかゝる犯罪者を有する爲に機能を停止されて居る僧伽である。其處で此の様な不見罪者から僧伽を救ふ立法として案出されたのが不見罪舉罪羯磨である。

不見罪舉罪羯磨は僧伽が犯罪者を呼び出し取調べて徵罪し豫審調書とも言ふべき表白を作成して、此に基づいて

白四羯磨に掛けて僧伽が罰罪を決定し服罪を命ずるのである。そして當人は四十三項の停止事項を有する、不共住と呼ばれて實際は僧殘の別住に近い謹慎生活を強制されるのである。但し此は、不見罪を罰するのであつて、既に犯して居る僧殘罪は當人の申告しない限り、伏罪を命じられないのである。故に不見罪舉罪羯磨は、明らかな犯罪者で、伏罪を申請しないものを應急に員數外に住せしむる處置である。そして、此は不定期のもので、當人が羯磨の處置に服務して自己の非を清淨にし出罪せんとすれば（律藏では明らかでないが恐らくは不見罪に問はれた罪を見罪し服罪することを申請するとせば）舉罪羯磨は直ちに解除となるのである。其處で、僧伽がかゝる不見罪舉罪羯磨をなしたのは、第一には不見罪の不法を罰するにあるも、更に重大なのはかゝる不見罪者を不共住の宣告に依つて僧伽の員數外へ出し、其に依て僧伽の機能を防衛するにある。従つて亦、A地區の僧伽で不見罪舉罪羯磨を宣告された比丘が其宣告を受けずして、A地區を出て、B地區の僧伽に至り加つて、前非を祕して、歡迎されて生活することがあり得る。此は結局B地區の僧伽が不淨比丘の被害を受けることとなるのである。其處で此を防止する爲に此羯磨をA地區が宣した場合、A地區から各地區の僧伽へも宣示通達がなされることになつて居るのである。

以上の様な、具足戒の僧殘第十二と不見罪舉罪羯磨に見る關係は、他にも見られ、例へば、具足戒の波逸提第十九の如き非行と其れに對する波逸提第十二・第五十四・第七十一等の如き輕侮異語の行爲があつて、然も服罪（波逸提は應悔罪である）しない時には、不懺罪舉罪羯磨が採用され、又波逸提第六十八戒の如き場合には不捨惡見舉罪羯磨が採用される。又僧殘法第十三は、比丘が信者に對して非行をなして、一種の土地拂ひの制裁即ち驅出羯磨を宣せられ、其の宣告に従ふ様に三諫されても従はないものは僧殘罪となるとするものである。驅出羯磨は七種の懲罰羯磨の一つであるから此は不見罪等の羯磨の場合とは逆に懲罰羯磨の實行を僧殘法が保證する形式となつて居



る。然し實際は、僧殘法第十三が制定された時には、驅出の語は用ひて居るが驅出羯磨ではなく、單に僧伽が非行比丘に其の土地を去ることを求めたのであつて、それに對して非行比丘が肯じなかつたものであると考へられる。そして、此の非行比丘の退去を求める方法を其の後に強制的なものに合理化す爲に七種羯磨の一種としての驅出羯磨の成立を見たと考へるべきであつて、然すれば、此場合も亦、驅出羯磨は僧殘法第十三に強制的効果を付與するものと考へられるのである。

## (五)

具足戒は比丘をして比丘たらしめて居るものとしては、比丘たることの第一の重大法であるが、其にもかゝらず佛教に於ける戒律には、宗教的な意味、即ち、此れなくしては宗教的目的が達せられないとか、或ひはタブー的な禁律の意味だとかと言つたものが全く存しないのである。例へば、僧伽から驅出羯磨や其の他の懲罰を受けると直ちに還俗して其れを免れることが出来るし、具足戒第一の不淨戒にしても、その戒文から言へば一時的に捨戒還俗して不淨を行じて、再び受戒して比丘になれば何等罪にはならないと物語るものとすら言へるのである。又驅出羯磨等には、羯磨解除の場合の一つに還俗を數へて居るし、更に、別住健度には、別住に伏罪中の者が擧罪羯磨の不共住に服罪中の者が、其れを免れる爲に還俗して、更に再出家を求めた場合の許し方を種々述べて居るのであるが、還俗は具足戒を捨てること、聖職を廢道することであるから、此等のことは、他の宗教々團では恐らく考へ得られなかつたことと思はれる。

佛教では戒律は、悟りの道ではない。戒は防非止惡の效ありと言はれても、或ひは三學の第一と言はれても、

それは戒尊重を強ひるもので、少なく共積極的な佛道の助力法ではない。眞理と人間の對決を求める佛教は戒ではなく智こそ悟りへの乗物である。如何様に解釋されるにしろ戒禁取見と言ふ惡見を數へる佛教に、行爲的禁律が佛道の一部として成立する見込は理論的には成立しない筈である。悟りへの道は、在俗者に取つても聖職者に取つても平等に、具足戒や其他の戒や律に關りなく開けて居るのである。法然上人が、念佛出來る生活の仕方生きよと言はれたのは、釋尊の佛教的立場を正確に言ひ現されたものである。

具足戒は比丘となる戒律であるが、比丘となることは悟りの道への近道を得ることではない。還俗出家を何十度繰返すのも自由である。従つて其の様な出家者の戒律に、佛道的効果を認められないのが當然である。所詮具足戒は比丘として供養に生きる特權に對する義務の意味を持つもの、そして供養に生きて佛道に專念させて呉れる効果を持つと言ふにすぎないものとも言へる。此様な戒律にタブー的禁律の意味のないのは當然である。又律藏自身も、佛陀の教團が初めは無戒律であつて、此が理想的な清淨教團だつたことを認めて居る。然し、團體生活は規律を必要とし、必要とするに従つて制戒を重ねて二百有餘戒に至つて授戒の儀典化すると共に具足戒となつたのであるが、其の制戒の理由は、何れの制戒にあつても、比丘即ち教を説く聖職者がかゝる行爲をなしたのでは佛教の信を失ひ、又信者の信を失ふ恐れありとして制せられたもので、かゝる行爲をなせば宗教的な責罰ありとする意味のものではない。まして況や、キリストの三大戒命の如き、宗教的な修道の一部又は大部分をなすものとは本質的に別なものである。

以上の如きものが、具足戒として尊重されるのは、比丘たる爲めの受戒の儀典であり、毎半月に比丘たることを確認する布薩式の儀典たる故である。具足戒を犯することは、儀禮的に受戒を誓つた責任を犯すものではあるが、

悟りへの障害たる自覺を伴はないのである。かゝるものが、一般宗教の禁律と同様な仕方、即ち自己を清淨にする爲めに、自身から伏罪を申出で伏罪して出罪を求める告解懺悔の贖罪の仕方を要述しても成立しないのである。換言すれば具足戒は佛道修行者たる比丘の集團生活の規律で、それは佛道に關はるのでなく集團生活にかゝはるのであるから、他の宗教の禁律に於ける様な、仕方は成立し難いのであると考へる。既に繰返し述べた所からも想像される様に、實際としては具足戒は僧伽の取締規則である。其れが宗教的禁律的にさんげ贖罪の仕方で受持されたのは此を制せられるのが佛陀であり、且つ偉大な佛陀の人格が僧伽の支柱だつたからである。佛陀の晩年から没後になつて、特に教主なき所謂民主教團となつてからは最早それは不可能なことであつたと考へられる。其處で、僧伽に不利益を致す非行者のある時に具足戒のみでは最早制しやうもなくなり、此處にかゝる者を處分して、僧伽全員の利益を護る方法が必要となり、七種の懲罰羯磨の成立を見るに至つたものと考へられる。だから羯磨制度の七種羯磨は具足戒成立後のものである。（大正大學教授）

